

【国際シンポジウム報告】

日本の社会科学，その知的伝統

—— A.E. バーシェイ著『近代日本の社会科学』をめぐって ——

はじめに —— シンポジウムの経緯 ——

後藤 康 夫

最初に，企画に携わった者として，その経緯を少しばかり記すこととします。開催にあたり，経済理論学会のメーリングリストなどに掲載した「案内」は，次のようなものです。

国 際 シ ン ポ ジ ウ ム

「日本の社会科学，その知的伝統

— A.E. バーシェイ著『近代日本の社会科学』をめぐって—」のご案内

このたびカリフォルニア大学バークレー校教授の A.E. バーシェイさんを福島大学にお招きして，国際シンポジウムを開催することとなりました。

ご関心のある皆様方のご参加をお待ちしております。

日 時：2008年7月16日（水） 13:00-17:00

会 場：福島大学金谷川キャンパス 行政政策学類2階大会議室

主 催：福島大学経済学会

プログラム：

○パネリスト（1人20分程度）

寺出 道雄（慶応大学教授）

八木紀一郎（京都大学教授）

馬場 宏二（東京大学名誉教授）

○リプライ（1時間程度）

A.E. バーシェイ（カリフォルニア大学バークレー校教授）

○座長

後藤 康夫（福島大学教授）

— 休憩（15分）—

○一般討論

○総括コメント

終了後 18:00 から懇親会（福島駅前，5,000 円程度）を行います。

なお，17 日（木） 10:00-12:00 福島大学図書館「大塚久雄文庫」のガイドツアーを行います。

大学は前期終了直前の時期でしたが，シンポジウムには全国各地から 50 名を超える参加者がありました。懇親会にもパネリストをはじめ，20 名を超える人が集い，会場はさながら，日米間，学派間，世代間など「多様な交流空間」となったようです。

この場をお借りして，参加者の皆さん方，とりわけご多忙中にもかかわらず，パネリストをお引き受けいただいた寺出さん，八木さん，馬場さん，はるばる太平洋を越えて福島に駆けつけていただいたパーシェイさんに，あらためて感謝申し上げる次第です。また，資金面で支援いただいた「福島大学学術振興基金」，経済学会など本学関係者の皆さん，そしてパーシェイさんとは日頃からコミュニケーションをとり，とりわけ今回は細部にわたりお骨折りいただいた後藤宣代さん（福島県立医科大学医学部非常勤講師）に御礼申し上げます。

そもそもこのような企画が実現できることとなったのは，筆者が 2004 年 10 月から半年間ほど，カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所日本研究センターに客員研究員として滞在したことが始まりでした。04 年の春頃，今回のシンポジウムで取り上げることとなったパーシェイさんの新著を手にする機会がありました。そこでは，なんと「日本資本主義論争」が真正面から論じられ，日本マルクス主義の学問的成果が高い評価を得ているのではないか。すかさず，受け入れをお願いしたところ，快諾してくださったのが，当時日本研究センター長を務められていたパーシェイさん，その人でした。

帰国してからも，筆者は何回かバークレーにパーシェイ研究室を訪れる機会があり，山田鋭夫さんによる日本語訳が刊行されてからは，「是非，福島でシンポジウムを」と企画話をしてきたところ，今回，このような形で実現の運びとなったものです。

なお，シンポジウム前日の 7 月 15 日には，パーシェイさんによる学生向け「学術講演会」（経済学会主催：演題「アメリカにおける日本研究の動向」）が開催されました。一般市民にも公開され，聴講者は 250 名余で，大教室は満席となりました。そのさい資料として，「What is Japan to us? (われわれにとって日本とはなにか?) A Historical sketch of Japanese Studies in the United States (アメリカにおける日本学研究的歴史的素描)」と題するレジュメ 4 枚が配布されました。これは翌日のシンポジウム参加者にも，企画者側から参考資料として配布されています。

補注：編集上のふたつの「お断わり」

ここで，シンポジウム内容を本誌に掲載するにあたり，編集上のふたつの「お断わり」を書いておかねばなりません。

ひとつは，パネリスト 4 名の原稿についてです。今回本誌掲載にあたり，こちらから，シンポジウムでのコメントや発言にとらわれず，あらためて「書き下ろす」形で，思う存分に執筆を，とお願いしたものです。ですから，シンポジウムそのものの再現ではありません。この点，ご諒解ください。

International Symposium

もうひとつは、筆者にかかわることです。シンポジウムでは、ひたすら「進行係」に徹していたのですが、今回、編集上、座長の任を務めた者として、シンポジウムの経緯と、なにか「まとめ」のようなものを書くようにということとなりました。そこで「まとめ」の方は、そのかわりと言うわけではありませんが、バーシェイさんの問題提起を受ける形で、小論「構造と主体」を執筆させていただいた次第です。この点も、たいへん恐縮ですが、ご諒解いただければ、と思います。